

- 栗林と林組の人びと - ワークショップを開催しました

文書館では、横浜国立大学教授の多和田雅保さんを講師にお迎えし、3回目の開催となるワークショップを、5月7日に公民館講堂で開催しました。今回は、「栗林と林組の人びと」と題して、小布施史料調査会の最新の調査で見出した、江戸時代の小布施村林組で「林守」を務めた旧家伝来の史料について、解説をいただきました。

江戸時代の小布施村は、町組と林組からなり、町組は幕領(天領)に属し、林組は幕領と松代藩領に属していました。林組の栗は、村内居住の「林守」を介して松代藩主に上納され、その中でも最上級のものは松代藩主から将軍に献上されました。

多和田先生からは、上納する栗にはランクがあり、納入の期限の指定があったことなど、江戸時代の栗林では、質の良い栗を栽培することが強制され、そのために品質管理の技術が進んだのではないかとのお話がありました。

今回紹介された 11 点の史料のうち、慶応2年(1866)9月の栗御林百姓から林守に宛てた書状の現代語訳(加筆あり)を紹介します。

「福原村の百姓多吉が申し上げます。私は栗御林を数か所、所持してきました。しかし、子年(元治元年(1864))の春から栗御林へ「白髪太夫」という悪虫が、どこから種蝶がやってきたのか、おびただしく発生し、栗御林の木の葉を残らず食べ、栗が実らず迷惑していたところ、丑年(慶応元年(1865))も同じ虫がおびただしく発生し、前と同じく栗が実らず、今年に入って枯木粉が多い状態になり、さらに八月八日の大風で枯木はもちろん青木までも吹き折れ、栗の実が少しもなく、困っています。こんな状態では当分栗の実ができるのかおぼつかないので、この御林のうち、飯田村地境の石橋から小布施町龍雲寺裏まで、南北430間余、東西20間通りを開



発したくお願い申し上げます。このお願いのとおり聞いていただけるならば、早速家作などを行いますので、やがては栗御林新田を一村にしたいと思いますので、どうか格別の御慈悲によって開発をお認めいただければとてもありがたき幸せに存じます。以上のとおり上様へ開発のおとりなしをお願いします。」

御林が林組外部の個人所持分となっていること、白髪太夫や大風(台風)などが栗の上納にとって障害となっていたこと、栗が結実する見込みがないため、大規模な開発を願っていたことなどが、幕末の書状から読み解くことができます。

【第4回ワークショップ開催決定！】

「古文書からみえる小布施の生活文化④」

日時 11月12日(土) 午後3時～4時30分

会場 小布施町公民館3階 講堂

「館報で見る 60 年代の小布施」



婦人会による美化運動
(昭和 39 年)駅前通り

- 企画展示を開催中 -
文書館では、9月 24 日(土)まで、企画展示を行っています。

公民館報「館報おぶせ」に掲載された写真を展示・解説し、高度経済成長期の小布施町の動きや町民の姿をご覧いただけます。